

京都嵯峨大学油画分野宇野和幸ゼミ展「U Know they mean ~ 受容体としての表現 ~」は、宇野が和紙にミクストメディアの作品を5点、小泉茂理がシリコンを用いた作品を二点、五影華子がキャンパスに油彩の作品を9点、展示した。材質が示しているように、宇野ゼミは開放感に満ちている。

展覧会タイトルを読み解こう。受容体とは生物の体内にあって、化学物質や外部環境の刺激を感知し、結合・変質する分子を総じてこう呼ぶ。...しかし、総てに反応できるものではない。...貴方はそれらが受容体として意味することを、とフライヤを要約する。自己の内部に止まらず、外部との交流を図る。しかし、無理する必要はない。なるがままにしておけばいいのだ、と解釈すると、宇野ゼミの開放感は一層広がる。

会場全体は、異様な雰囲気立ち込めている。それは「これが美術なのか」というものではなく、「これは一体なんなのか」という程の具合だ。五影の油彩が平面であるために、この問いは一層混乱を招く。



五影の油彩は油彩と思えない程に、滲みや斑といった日本画的要素を強調する。抽象的画面から「そのような分類は関係ありません」という声が聴こえてきそう。これはある意味、絵画以前の状態であると判断することができる。では絵画に成ればいいのか。無理する必要はない。自らの鼓動を、雰囲気として感じ取れば済むことなのだ。

宇野の作品群は、画廊の勾配を破壊する。磁場が傾いてしまったのではないかと、見る者の感覚を攪拌させるのだ。正面から作品を見詰めると、和紙による層が目飛び込んでくる。この断面は、植物の繊維が我々の人体を張りめぐる血管や神経の束にさえ同意しながらも、普段、絶対に見せない表情を強調しているということが出来る。



宇野作品によって失った重力を取り戻すことで、更に会場をパニックに貶めるのが、小泉が制作した浮き上がる人体である。シリコンを包み込む鋼硬線は、正に人間の内部と外部の境界線、ホメオスタシス、血流と空気中に含まれる湿度の関係性を具象化しているように見える。「これは一体何なのか」と問う我々は、果たして人間なのか。

この展覧会は、限られたスペースの中で違和感という実態を焙り、晒し、問いかけた。開放感が閉塞感に繋がらないのは、この問いかけが鍵となる。次回の展示も楽しみだ。